

東北大震災を報じるテレビに釘付けの日々が続いてるというのに、統一地方選挙は日程通りにやってきた。ボク達は、震災の衝撃に突き動かされるように、選挙カーは無声で動かすことにした。結果は、西成区では府会の前職は落選し、市会の現職は辛うじて当選したものの、得票を大きく減らす惨敗だった。大阪維新の会の代表橋下知事が、西成区にも大きな宣伝カーで登場し、黒山の聴衆を前に颯爽たる演説を行ったが、わが候補の無声車は、存在そのものさえ忘れられたかのようだった。ボクは、選挙カーの上の橋下さんの勇姿を、かつての土井たか子さんとダブらせていた。そうだ、あの時は、ボクも黒山の人だかりにいた。ボクがああ時の社会党に共感したように、いま大阪市民は橋下さんに共感し、「山」を動かす選挙結果となり、ボク達は散った。

二人の候補者の想いと同じだったかはわからないが、ボクの無声車への想いは、政治の「原点」に還るということだった。ボクは、石巻市で震災から10日振りに奇跡の生還を遂げた老婆と孫の少年のことが脳裏に残っていた。少年は、声を枯らして助けを求め、マイクがあったらと願ったことだろう。ボクは、民主党の内輪もめを見て、また名古屋市議選での現職議員の大敗を見て、政治は、抗争の長いトンネル



ボク達が選挙カーのマイクを使わなかったわけ

の中で、道を誤ったのではと思った。ボクも、政治は抗争、闘争だと思っていたが、やっとなんじゃないかと思い始めた。だから、「原発は安全だ」という側も、「原発はいらない」という側も、けっきょく、抗争の言葉を並べているのではないのかと感じてしまう。

ボクは、政治の原点は、「合意」への営みだと思った。力で合意を強制してはならない。ましてや粉飾やデマはもってのほかである。また、合意を他に委ねてはならないし、「神話」を創ってもならない。とても難解なことだが、市民社会にとって、合意は日々必要なことである。声高で、紋切りで、自己中心的な宣伝を控えて、合意すべき事柄を率直に、丁寧に、多元的に語りかけるのが選挙で、選挙

カーの大きなマイクが、道を誤った政治の象徴のように映った。ボクは、橋下さんの主張にも、わからないことは聞き直し、是非をはっきりさせながら、合意の形成に参加していこうと思う。間違っても、丸ごとのダメだしや決めつけはやめようと思う。できるなら、橋下さんや維新の会にもそう願いたいものだ。きっと、東北の被災者の人たちは、これから気の遠くなるような合意を形成していかれるのだろうが、ボク達も参加していこうと思う。さっそく、復興財源の確保という合意が差し迫ってくるのだろう。

(株)ナイス代表取締役 富田一幸



hidarimakiの
この逸話

飢餓海峡



監督：内田吐夢
原作：水上勉
音楽：富田勲
キャスト：三國連太郎
左幸子
伴淳三郎
高倉健
製作：東映作品
劇場公開：1955年モノクロ18巻
DVD発売：東映ビデオ

中高校生の頃は近所に私設図書館があった。つまり個人商店の貸本屋である。書籍のみを扱うTUTAYAのような存在で借り賃を払って持ち帰る。乱立していたが数年後に消滅していった。小学校を卒業し漫画も卒業した頃、貸本屋に連日単行本を借りにいき、ここで当時流行作家だった松本清張や水上勉らの作品を読んだ。本屋のオヤジが「これおもしろいで」と言って入荷したばかりの新刊を貸してくれた。

清張は既に大家という風貌で、骨格ある作家の印象を少年の心に刻んだ。水上勉には翳があり太宰治を彷彿とさせるイケメン作家で、当時両作家は社会派と呼ばれて双璧だった(なび1月号「いい湯かげん」富田氏参照)。僕は、人間の哀切さと繊細な文章表現をもつ水上が好きで、「耳」「雁の寺」「金閣炎上」など借りたのを覚えている。中でも「飢餓海峡」という長編小説は、殺人者を愛しながらも殺されていく、貧しく幸薄い娼妓の不条理がいつまでも頭に残り、

映画化されたこの作品を後年に見た。小説の分量同様この映画も3時間という長尺で、監督は「宮本武蔵」、「大菩薩峠」を撮った内田吐夢が、随所にフィルムをネガ表現で編集し、不安な心象を語る実験的作品となった。

乗船者名簿以外に2名の死者が函館湾に上がった。彼らは刑務所を出所したばかりで、しかも質店の一家惨殺を計画した男たちと判明する。そして男たちにかかわる第3の男の存在が浮かび上がる。54年、死者1155人を出した青函連絡船「洞爺丸」の海難事故に材をとる作品だが、時代を戦後混乱期に置き換えている。事件は前半部分で明かされ、謎解きドラマというより、殺人犯や娼妓の日常、彼らの動機や行動を追い詰める刑事たちの生活が描かれる。事件性よりも人間の奥に潜む情動や欲望などが優れて表現され、日常の中のやりきれない貧しさが哀しい。とくに犯人に大金をもらい東京で身を立てる東北の貧しい娼妓は、「にっぽん昆虫記」(なび1月号)にも出演の左幸子で、両作品から東北の極端な貧しさを知らされた。左は、犯人の爪を再会まで大切にしておくが、それが原因で殺害される娼妓の一途な純愛を好演した。

殺人者、娼妓、追う刑事ら全ての基底には、戦後日本のきわめて貧しい暮らしがあり、その貧しさが互いの利害に影響を与える。清張作品の「砂の器」も同様なテーマだった。戦後の飢餓状況を隠蔽し、貧しい自らを生き長らえさせる主人公たちの犯罪には、戦後の僕らに善の道德律では計れない価値を与えた。貧しさの境遇が殺人という選択に向わせるのか、犯罪への正当性は許容されるのかと。

hidarimaki

